

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	教育学	専攻
研究代表者 (2020年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号			氏名	
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年 <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年 (学生番号: 18JF002N)			岩佐 菜々子 印	
指導教員	所属部局・職			氏名	
	文学部・教授			秋葉 昌樹 印	
自然・人文・社会の別	自然	・	人文	・	(社会)
				個人・共同の別	(個人) ・ 共同 名
研究課題	子どもの逸脱をどう理解するか：幼稚園年少級における「気になる子」の相互行為分析を通して				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2020年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年			氏名	
	文学研究科・教育学専攻 博士課程前期課程・2年			岩佐 菜々子	
研究期間	2019 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 198,961円 / (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、保育現場における「気になる子」に焦点を当て、「気になる子」に対する保育のあり方について検討することを目的とした。「気になる子」とは、日々の教育活動においてなんらかの課題があるとされる園児や児童あるいは生徒を指す包括的な用語であるが、とりわけ保育界においてこの言葉は、一種の「テクニカル・ターム」として広く普及している(田中 2009, p. 57)。近年、この「気になる子」と発達障害との関連性が指摘されるようになり、「一人ひとりの教育的ニーズ」を早い段階で特定し、それに対して支援したりするための方法が提示されるようになってきている。一方で本研究では、現場での実際のやりとりを出発点にして、そこからその実践の意義を論じ、さらには反省的發展への契機を導くことを目指した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 気になる子 } { 保育・幼児教育 } { エスノメソドロジー }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1、研究背景**

近年、教育現場および教育に関する諸研究において、「気になる子」への関心が高まっている。特に、発達障害児／者支援の制度化が進み、その早期発見・早期支援が強調されるなか、「気になる子」—とりわけ幼稚園や保育所といった就学前段階での「気になる子」—と発達障害の関連性を指摘する研究が増えている(竹内 2000, 白垣・梅下 2018 他)。これらの研究では往々にして、「気になる子」＝「発達障害の可能性のある子ども」という前提のもと、「気になる子」への社会的な支援のあり方や個別的な対応の仕方が論じられている。

一方で、このように医療的な枠組みで一般化・抽象化されて語られるようになった「気になる子」に対して、保育者たちが日常的に抱く「気になる」という感覚は、その場その時の「生活の中」に根ざした具体的なものであり、それは必ずしも発達障害と同一線上にあるものではないということを明らかにした研究がある(美馬 2012)。つまり、テクニカル・タームとしての「気になる子」と実践の現場における「気になる」子ども像との間には、少なからぬ乖離が生じている可能性があるということだ。そしてこうした認識のズレによって、(主に個人特性に着目してきた)「気になる子」研究を通して提出される知見の多くが、保育者たちの実践的な問題関心にとっては不十分なものに留まってしまっている。

2、研究方法

以上の問題点を解決するためには、保育現場では実際のところ「気になる」子どもがどのように認識され、またそうした「気になる」行為や状態に対してどのような働きかけがなされているのかということを一に明らかにする必要があるのではないかと考えた。言い換えれば、「気になる子」あるいは「気になる子」への保育のあり方について論じる際には、医療の論理から始めるのではなく、あくまでも現場の論理を踏まえる必要があるのではないかとということである。そのための手がかりとして本研究では、エスノメソドロジーにもとづく研究手法を採用した。主な研究内容を以下に示す。

- ・ 関東圏内の私立幼稚園年少級において週に1回程のペースで参与観察およびビデオ撮影を行った。また、毎回の調査時に簡便な聞き取りを行ったり、学期末には報告会を兼ねたデータセッションを行った。
- ・ 担任教諭が当初から「気になる」と語っていた園児に着目し、当該園児が「逸脱」的に振る舞っていると観察可能な場面を抽出した。これは、保育者や他の園児たちがいかにして「逸脱」的な振る舞いに対応しているのかを描き出すことで「気になる子」をめぐる現場の倫理に接近できると考えたからである。
- ・ 調査と並行して、人びとの実践を記述するための「道具立て」の一つである「成員カテゴリー化装置」に関する一連の理論研究を行い、分析視点を明確化した。
- ・ 以上のデータおよび理論的視角を用いて、「気になる」子どもがまさに観察可能な場面が、どのような相互行為の中で／を通して達成されているのかを明らかにした。そのうえで、当の実践を成り立たせている現場の論理について検討を行った。

3、分析知見

本研究では第一に、上述した「気になる」子どもが外遊びを切り上げることが出来ずに泣いてしまうという場面に着目して、そこで繰り返されているやりとりを記述した。こうした行動に着目したのは、それが発達障害の幼児に典型的に見られる事例として言及されることがあるからだ。そこでは、「気持ちの切り替えが苦手」なために外遊びを切り上げることが出来ないのであって、そのような子どもに対する「適切な」対応とは、「見通しを立ててあげること」「気持ちを切り替える準備時間をつくる」などといった、特性に配慮した「支援」としての関わりだとされる。一方で、申請者が着目した場面においては、以上のような対応とは異なることが行われていた(なお付言しておくならば、あくまでも今回検討の対象とした場面において異なる対応をしていたのであって、別の場面では療育者のアドバイスを取り入れて「少し前に声をかける」ということも行っていた)。

そこで、この場面がどのように成り立っているのか(秩序立っているのか)、その相互行為的な方法を詳細に記述した結果、次のようなことが分かった。すなわち、この場면을成り立たせているのは「園児」というカテゴリーに対して一般的かつ規範的に求められる振る舞い方を志向した、いわば教育の論理であるということだ。当該場面において先生は、たとえその園児が「気になる」子どもであったとしても、いずれは「幼稚園のルール」を「守ることができる」と考えており、そうした想定を維持し続けながら働きかけていたのである。

そのうえで、こうした教育の論理がもつ意義を、医療化論の知見(Conrad & Schneider 訳書, 2003)をもとに現

研究成果の概要 つづき

行の障害児支援制度を相対化しながら位置づけた。「医療化」とは「非医療的問題が通常は病気あるいは障害という観点から医療問題として定義され処理されるようになる過程」(ibid., p. 1)のことを指しており、この概念に依拠した研究は、「医療化」の裏で「逸脱」への社会統制が正当化されていること、また、「逸脱」の問題が個人化されて社会的な要因が覆い隠されていることなどを指摘することで、「医療化」した社会への「異議申し立て」を行ってきた(木村 2006)。本論では、医療化論が明らかにした「責任の転嫁」および「社会問題の個人化」という事態と絡めながら「園児」カテゴリーに志向し続ける教育の論理の意味について考察し、それを通して、当場面での働きかけは「障害」カテゴリーに伴う社会的地位の引き下げや排除といった問題を回避する機能を果たしているのではないかと論じた。

一方で同時に見えてきたのは、皆と同じように振る舞わない子どもを「問題」とする私たちの視線、さらにはそうした視線を生み出す制度的な構造を反省的に捉えることの必要性であり、このような視点から保育実践について検討していくことが今後の課題となった。

4、本研究の意義

本研究では、子どもの「逸脱」的な行動が、医療という(幼稚園をはじめとする教育現場にとっては)非日常的な論理によってではなく、あくまでも日常的な論理のもとで対処されている様相を描き出してきた。そして医療の知が科学的なエビデンスを伴って、言い換えれば正統的なものとして教育現場に普及するようになるなか、そのことの問題性について検討し、あらためて教育的な論理の意義を明らかにした点に本研究の特色があると言える。こうした知見によって第一に、教育現場における子どもの「問題」を安易に発達障害と結びつけて理解し対応してしまうことの危険性が浮かび上がった。また第二に、教育の論理自体にも反省的な検討を行う余地があることが分かり、このことから、子どもの「逸脱」を通して教育実践(保育)のあり方そのものに目を向けていく研究の方向性が示された。こうした研究は、第一のようなリスクを回避することにもなるだろう。

5、今後の展望

以上の知見を踏まえたうえで、今後の「気になる子」研究の一つの方向性として保育の「文化性」を描き出す研究のあり方を提示した。保育学においては元来、「気になる子」はそれを通して保育全体の省察を導く契機として位置づけられていた。より具体的に言うと、「初めから『気になる子ども』という子どもが存在するわけではなく…『保育者が』気になる」(矢萩編 2010, p. 174)のだといった視点を持つことによって、保育そのものあるいはそれぞれの保育者がもつ「文化性」を自覚すること、またそうした営みを通じた保育実践の発展や保育者の成長が期待されていたのである。

しかし、「気になる子」と発達障害が関連づけられる時、しばしば上記のような視点は見失われてしまう傾向にあるように思われる。そしてこうした傾向は、保育実践のさらなる発展を妨げてしまいかねない。そこで本論では、なぜある子どものことが「気になる」のか、何が「気になる」ことを生み出しているのかということを実証的に明らかにしていくことを通じて保育(者)の「文化性」を描き出すような「気になる子」研究の意義と方法について検討した。本研究では、その見取り図として相互行為のなかで／を通して立ち上がる「文化」概念に着目し、相互行為論的な研究の方向性を示したに過ぎないが、今後こうした方法論をより精緻化し、実証的研究を蓄積していくことが求められる。

・参考文献

Conrad, P. & Schneider, J. W., 1992, *Deviance & Medicalization: From Badness to Sickness*, Expanded ed: Temple University Press. (=2003, 進藤雄三監訳・杉田聡・近藤正英訳『逸脱と医療化—悪から病へ—』ミネルヴァ書房)。

木村祐子, 2006, 「医療化現象としての「発達障害」—教育現場における解釈過程を中心に—」『教育社会学研究』第79集, pp. 5-24.

美馬正和, 2012, 「保育者は〈気になる子〉をどのように語るのか」『北海道大学大学院教育学研究紀要』第115号, pp. 137-152.

白垣潤、梅下弘樹, 2018, 「幼稚園における特別支援教育の実態について—対応に苦慮しているケースの実体と保育者の専門性について—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』, 第51巻, pp1-7.

竹内貞一・坪井寿子・藤後悦子・府川マユミ・佐々木圭子, 2010, 「保育園における『気になる子ども』の現状と支援の課題」『東京未来大学研究紀要』第3号, pp. 77-83.

田中秀明, 2009, 「保育者養成校の学生が抱く「気になる子」についての基礎的研究」『清泉短大研究紀要』第27号, pp. 57-65.

矢萩恭子, 2010, 「人とのかわりが難しい子どもへの援助」塚本美知子・大沢裕編『新・保育内容シリーズ2 人間関係』—藝社, pp. 174-175.

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①
1-1: 岩佐菜々子 2020, 「『気になる子』研究への相互行為論的アプローチー保育／幼児教育の『文化』への着目ー」『立教大学大学院教育学研究集録』第17号, pp.15-24

②
該当なし

③
該当なし

④
該当なし